

彙 報

会長 西田 龍雄

昭和 55 年度第 2 回常任委員会

日 時：7 月 19 日（土）午後 1 時～6 時

場 所：学習院大学北 2 号館 621 号室

出席者：西田龍雄，石綿敏雄，大東百合子，奥津敬一郎，徳川宗賢，平山輝男，
松本克己

欠席者：吉川 守（委任状あり），塩谷 饒

議 事：1) 第 13 回国際言語学会議について。

上記問題について検討し，つづいて 1 時 45 分より，本年度第 1 回委員会における決定に基き，国際言語学会議準備小委員会側代表と会談した。準備小委員会側の出席者は，井上和子，北村甫，下宮忠雄，長嶋善郎の 4 氏であった。まず，準備小委員会側の北村甫氏より，① 開催の形式（学術振興会を窓口として免税措置を受けることのできる指定寄付金をつのる為には，恒久的学会が主催者となる必要がある。このため，日本言語学会が主催者となり，学術会議あるいは文部省が後援，他の関連学会が協賛するという形式が最も望ましい），② 運営組織（あらたに組織委員を設け，委員長 1 名，副委員長 2 名，事務総長 1 名，同助手若干名を置く），③ 事務局（学習院大学に置く），④ 経費（参加者 1,000 人，予算規模 4,400 万円とし，収入の 60% を参加費，40% を寄付金に頼るものとする）についての説明があった。また準備小委員会側の井上和子氏よりプログラムの説明があった。続いて，準備小委員会側代表と常任委員会との間で意見の交換が行われ，常任委員会からは次のような意見が出された。

1. 言語学会の組織全体から組織委員会に人材を供給すること。
2. 経済的に学会会計に影響を与えないという何らかの保障が必要である。また寄付金集めについて具体的な計画案が示されるべきである。
3. 赤字が出た場合、寄付が予定通り集まらなかった場合の処理について、具体的方法の提示が必要である。予算規模に応じて、小規模開催の代案を作るべきである。
4. 日本語を会議用語に加える、或いは日本語についての分科会を設ける、という方向で、プログラムの再検討が望ましい。

このあと午後4時より、常任委員のみによる話し合いが持たれ、準備小委員会側の説明と質疑応答をめぐって、日本言語学会が主催する可能性と、その場合の問題点を検討した。

昭和 55 年度第 3 回常任委員会

日 時：9月6日（土）午後1時～5時

場 所：京大会館 220 号室

出席者：西田龍雄，石綿敏雄，奥津敬一郎，徳川宗賢，平山輝男

欠席者：大東百合子，松本克己，吉川 守（以上委任状あり），塩谷 饒

議 事：1) 第 81 回大会について。

プログラム（公開講演者，研究発表者及び司会者）を決定し，案内状作成の準備を行った。

2) 第 82 回大会会場について。

来年度春季大会の会場候補校を茨城大学とすることが了承された。

3) 東洋学研究連絡委員会委員，語学文学研究連絡委員会委員の選挙について。

上記委員会次期委員（任期は56年4月より3年間）の選挙を本年度第2回委員会で行うことが了承された。

4) 次期会長等選挙の日程について。

規約に従い，10月中に会費未納額に対して未納額を通知した上

で、11月末日の会費納入状況に基づいて選挙名簿を作成し、会長、委員、会計監査委員については12月中に投票用紙発送、1月末開票、常任委員の半数と編集委員長については2月始め投票用紙発送、3月始め開票という日程で、選挙を行うことが了承された。

5) 第13回国際言語学者会議について。

9月5日に行われた同会議準備小委員会について報告が行われ、第2回常任委員会における話し合いの結果に対する準備小委員会側の対応を待つ、という方針が確認された。

6) 金田一記念賞について。

上記の賞について、金田一京助博士記念会から推薦ならびに応募の依頼があったので、これを委員会、総会で紹介することが了承された。

第13回国際言語学者会議準備小委員会委員長服部四郎氏より、「日本語学会委員各位の誤解を防ぐために」(1980年9月17日)という文書を委員各位ならびに常任委員各位に発送するよう、会長あて強い要請があったので、常任委員にはかった上で、9月22日これを発送した。

昭和55年度第2回委員会

日 時：10月18日(土) 午前11時～午後2時

場 所：京大会館211号室

出席者：西田龍雄，石綿敏雄，井上和子，岩本 忠，梅田博之，大東百合子，長田夏樹，岸本通夫，北嶋静江，日下部文夫，国広哲弥，小泉 保，阪倉篤義，柴田 武，下宮忠雄，杉藤美代子，関本 至，塚本 勲，徳川宗賢，蛭沼寿雄，広戸 惇，前田富祺，松本克己，村山七郎，矢島文夫，山口秀夫，吉川 守，吉町義雄(以上28名)

オブザーバー：服部四郎，泉井久之助(以上副会長)，田村すゝ子，堀井令以知(以上会計監査委員)

欠席者(委任状あり)：飯豊毅一，池上二良，池上禎造，井上史雄，打田佐太郎，上野善道，大江三郎，奥津敬一郎，加藤正信，川本茂雄，W.A. グロータース，五島忠久，崎山 理，佐藤喜代治，佐藤 茂，佐藤純一，

塩谷 饒, 清水克正, 竹内和夫, 築島 裕, 徳永康元, 野村正良,
野元菊雄, 林 大, 早田輝洋, 平山輝男, 藤原与一, 松田伊作,
三根谷 徹, 和田祐一 (以上 30 名)

欠席者 (委任状なし): 池上嘉彦, 大江孝男, 大野 晋, 風間喜代三, 亀井 孝,
北村 甫, 木村彰一, 江 実, 田中克彦, 橋本萬太郎, 林 栄一,
三宅 鴻, 山末一夫 (以上 13 名)

報 告: 1) 第 2 回, 第 3 回常任委員会の報告 (常任委員会議事録参照)。

2) その他。

金田一記念賞候補研究の推薦ならびに応募の依頼について報告
があった。

議 題: 1) 次期大会会場について。

昭和 56 年度春期大会の会場を茨城大学とし, 大会運営委員長
を石綿敏雄氏に委嘱することを承認した。

2) 次期会長等選挙の日程について (上記第 3 回常任委員会議事録 (4)
参照)。

会長, 委員, 会計監査委員については 12 月中に投票用紙発送,
1 月末開票, 常任委員の半数と編集委員長については 2 月始めに
投票用紙発送, 3 月始め開票という日程で, 選挙を行うことが了
承された。

3) 東洋学研究連絡委員会委員, 語学文学研究連絡委員会委員の選挙。

投票の結果, 東洋学研究連絡委員会委員には徳永康元氏が, 語
学文学研究連絡委員会委員には堀井令以知氏が選出された。任期
は昭和 56 年 4 月より 3 年間。

4) 文学省科学研究費補助金の配分に係る審査委員候補者の選出。

上記候補者を推薦するよう日本学術会議から要請があったが,
締切り日が 10 月 11 日であったため, 常任委員によって郵便投票
を行い, 第 1 段の委員候補として風間喜代三, 日下部文夫の両氏
を推薦したことが報告され, 承認された。

5) 第 13 回国際言語学者会議について。

上記の問題について、7月19日に行われた第2回常任委員会で、同会議準備小委員会側の代表と持たれた話し合いによって、問題の所在が4つの項目に整理されたことが報告された（第2回常任委員会議事録参照）。

次に井上和子氏から、この4項目に対する準備小委員会側の見解が、以下のように伝えられた。

1. 言語学会による主催が正式に決まれば、準備小委員会は解散し、言語学会の意向に基づいて組織委員会を設ける。
2. 学術会議に提出した当初の予算は5,200万円であったが、出来る限り出費を抑える努力をし、小規模開催の予算を考え、3,270万円を計上した。基金の可能性としては、万博協会の補助金等が考えられる。
3. 赤字を出さないよう最大限の努力をするが、万一赤字が出た場合には、プログラム委員会のメンバーが中心になって、寄付金集め等、応分の努力をする。
4. 日本語が今大会の焦点の一つとなることは十分に予想される。しかし日本語の使用については、経済的理由から同時通訳をつけることは不可能である。代案として、発表者本人は日本語で発表を行い、同時に発表者本人の責任で準備した英文原稿を学生が読み上げる、という形が考えられる。

以上の見解に対して質疑応答が行われ、種々の意見がかわされた。討論の後、採決に移り、まず、第13回国際言語学会会議を日本言語学会主催とするか否かという問題を重要事項と認めることについて可否の投票をした結果、認めないことが採択され、つづいて、同会議を日本言語学会の主催とするか否かを本委員会の席上において決定することについて可否の投票をした結果、本席において決定する案が採択された。次に、第13回国際言語学会会議を日本言語学会主催とするか否かについて可否の投票を行った結果、本会の主催とする

案が採択された。なおこの件について具体的な問題は、今後、準備小委員会と本学会常任委員会とのあいだで検討することになった。

6) その他。

「言語研究」第78号表紙裏役員名簿中常任委員の項に誤りがあり、彙報中に誤植があったことについて、了解を求めた。

第81回大会

期 日：昭和55年10月18日（土）、19日（日）

会 場：京大会館210号室（第1日）、同101号室（第2日）

第1日（10月18日）

開会の辞： 大会運営委員長 西田龍雄

公開講演（午後2時～5時）：

安田章「朝鮮資料によって解明される国語の変遷」

長谷川欣佑「シンタクスの研究と Chomsky の文法理論」

第2日（10月19日）

研究発表（午前10時～12時）：

(1) 「タイ語の四拍語の構造」 佐藤博史

(2) 「英語の能動受動態の一検討
—— エンパシーの観点から ——」 菅野憲司

(3) 「共通日本語の語アクセント型のモーラ式分類と
音節式分類」 今津藤一

臨時会員総会（午後1時～1時15分）

研究発表（午後1時15分～3時45分）

(4) 「ケチュア語北ラパス方言の音韻的特徴について」 細川弘明

(5) 「[ノデアル]における結束性の研究」 霜崎 実

(6) 「日本語における名詞句の指示について
—— モンタギュ文法の観点から ——」 白井賢一郎

(7) 「複合述語と格指定」 益岡隆志

閉会の辞： 西田龍雄

◇ 物故会員

井桁貞敏（昭和55年1月11日逝去）

三宅史平（昭和55年5月29日逝去）

松本信広（昭和56年3月8日逝去）

受贈図書リスト（昭和55年7月1日～昭和55年10月31日）

アジア・アフリカ言語文化研究所 東京外国語大学要覧

（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1980）

カナノヒカリ Nos. 695-698 （カナモジカイ 1980, 7-10）

計量国語学 Vol. 12, No. 6 （計量国語学会 1980, 9）

研究紀要 創刊号 （鹿児島女子大学 1980, 3）

研究報告集 2 国立国語研究所報告 65 （国立国語研究所 1980, 3）

考古学雑誌 Vol. 66, Nos. 1 ; 2 （日本考古学会 1980, 6 ; 9）

国語学 第122集 （国語学会 1980, 9）

国語学 研究と資料 No. 5 （早稲田大学国語学研究と資料の会1980, 3）

国立民族学博物館 学術雑誌目録 欧文篇 1980 ; 和文篇 1980

（国立民族学博物館情報管理施設 1980, 3）

国立民族学博物館研究報告 Vol. 4, Nos. 3 ; 4

（国立民族学博物館 1980, 1 ; 3）

国立民族学博物館国内資料調査委員 調査報告集 I

（国立民族学博物館情報管理施設 1980, 8）

- 宗教研究 Vol.54 第1輯 (日本宗教学会 1980, 6)
 人類学雑誌 Vol.88, No.3 (日本人類学会 1980, 7)
 専修語学ラボラトリー論集 No.8 (専修大学 LL 研究室 1972, 12)
 朝鮮学報 第95輯 (朝鮮学会 1980, 4)
 通信 Nos.38 ; 39
 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1980, 3 ; 7)
 電子計算機による国語研究 X 国立国語研究所報告 67
 (国立国語研究所 1980, 3)
 東京外国語大学 八十周年記念論文集 (東京外国語大学 1980, 3)
 東京外国語大学論集 Area and Culture Studies 30
 (東京外国語大学 1980, 2)
 東方学 Vol.60 (東方学会 1980, 7)
 東方学会会員名簿 1980 (東方学会 1980, 8)
 東方学会報 No.38 (東方学会 1980, 8)
 東洋音楽研究 No.45 (東洋音楽学会 1980, 8)
 東洋学報 Vol.61, Nos.3・4 (東洋文庫 1980, 3)
 東洋文庫年報(昭和53年度) (東洋文庫 1980, 3)
 日本学術会議月報 Vol.21, Nos.5-9 (日本学術会議広報委員会 1980, 5-9)
 日本言語地図語形索引 (国立国語研究所 1980, 3)
 日本語学校論集 7 (東京外国語大学附属日本語学校 1980, 3)
 日本常民文化紀要 第6輯 (成城大学大学院文学研究科 1980, 3)
 日本民俗学 No.130 (日本民俗学会 1980, 8)
 放送文化 '80年8月号~10月号 (日本放送出版協会 1980, 8-10)
 民族学研究 Vol.45, No.1 (日本民族学会 1980, 6)
 月刊 みんぱく '80年6月号~9月号 (国立民族学博物館 1980, 6-9)
 山口国文 No.3 (山口大学文理学部国語国文学会 1980, 3)
 KIMERNYI, A. : *A Relational Grammar of Kinyarwanda*, Linguistics Vol.
 91 (University of California Publications, 1980)
 Archiv Orientální (Ar Or) Vol.47, No.4 ; Vol.48, No.1
 (Academia Praha, 1980)

Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Vol. XLIII, Part
2 (University of London, 1980)

PRESS, M. L.: *Chemehuevi: A Grammar and Lexicon*, Linguistics Vol. 92
(University of California Publications, 1980)

EGUCHI, P. K.: *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, African Languages
and Ethnography XIII (Institute for the Study of Languages and
Cultures of Asia and Africa, 1980)

Naše řeč: Ústav pro Jazyk Český, ročník 63, číslo 1-3,
(Academia, nakladatelství Československé akademie věd 1980)

Русская литература, No. 3; No. 2 (Ленинград 1979; 1980)

Русский язык в школе, Nos. 3; 4 (Просвещение Москва, 1980)

Slovo a Slovensnosť, ročník XLI, číslo 2
(Československá Akademie věd 1980)

Wissenschaftliche Zeitschrift der Wilhelm-Pieck-Universität, Rostock
XXVII; XXVIII (Wilhelm-Pieck-Universität, 1979)

Українська мова і література в школі, Nos. 6; 7 (Київ 1980)

◇ 訂 正

本誌第 78 号表紙裏役員名簿の内、常任委員の項は次のように訂正します。

常任委員 [* 印は 55・56 年度]:

(北海道・東北) 塩谷 饒; (関東) 石綿敏雄*, 奥津敬一郎, 大東百合子,
平山輝男*; (中部・近畿) 徳川宗賢, 松本克己*; (中国・四国・九州・沖縄)
吉川 守*

本誌第 78 号 162 ページ 1 行目, 昭和 55 年度日本言語学会決算表は昭和 55 年
度日本言語学会予算表に訂正します。

◇ 本誌は文部省昭和 55 年度科学研究費補助金の交付を得て刊行されたもので
ある。